

行の形で訳していった。しかし、「一貫した内容」とはいえ、5人の違った訳者による作業だったので一貫した英訳になりにくく、第1班の校閲員の一番難しい仕事は5様に訳された物の呼び名などを統一させることであった。その後第1巻の翻訳作業にかかり、COEプログラムが終了した2008年3月までに第1巻と第2巻を何とか刊行した。

第1班の心残りは全5巻の英訳ができなかったことだけではない。時間切れでテキストそのものには校正が十分でない箇所もあろう。英語のキャプションにはかなり気を配ったつもりであるが、中国語と韓国語のキャプションに関しては時間不足で校閲結果に自信がない。当初はフランス語のキャプションをも付ける予定であったが、そこまで手が回らなかった。また、英訳できない単語（例えば、「烏帽子」、「直垂」など）の辞書を作る作業はいまだ手つかずの状態である。

では、これからの展望はどうか？非文字資料研究センターの企画として、第1班の編纂員において次のようなことを考えている。

結論からいうと、これからの3年間の間に、『絵引』の残りの3巻の刊行を試みる、ということである。

そのために、まず、2008年度の仕事として、英訳スタッフを構成し、COEと同じく翻訳に取り掛かる。おそらく、今までの作業よりスムーズに行くはず、と楽観している。基本的な英語の呼び名はもう表になっているし、

要領が大分分かってきているからである。

英訳原稿ができるまでの間、「研究会」の形として、第1巻と第2巻を見直して、その反省点をこれからの編纂に生かせるようにしたい。できたら、「外部評価」でフィードバックを得たい。また、さっそく大学院生を中心に、先に触れた辞書の準備に取り掛かるようにしたい。フランス語キャプションなどの可能性も考えたい。第3巻の翻訳原稿が入り次第校閲し、なるべく早く刊行できるようにしたい。その後、徐々に第4巻と第5巻の訳、校閲、発行もできるようにしたい。

しかし、予算、著作権などのことで、第1班の裁量のみでは図れない課題もある。例えば、第1巻と第2巻は文部科学省の方針で無料配布になっていたが、これからは販売するかどうか。

第1巻と第2巻に付け加えて残りの3巻を出すか、それともセットとして再発行し、合わせて出すか。『絵引』英訳のCD-ROM化の形で出せるか。該当する部署と相談が必要となる。

聞いた話によれば、原文の『絵巻物による日本常民生活絵引』は思いのほか、海外の日本関係の大学院で使われているようである。願わくは、*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan*も同様に広く役に立つものにしたい、というのは関係者全員の抱負である。

個別共同研究

関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集

関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集

北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員 / 研究班代表）

本研究は21世紀COEプログラムにおいて課題とした「環境に刻印された人間の諸活動」(災害グループ)で実現させた「関東大震災・地図と写真のデータベース」をさらに充実、データ更新を行う。具体的には、「関東大震災・地図と写真のデータベース」が地図に関東大震災における延焼シミュレーションおよび被害・救済関係の写真を重ねデータ化したものの、その後の復興過程につい

てデータを重ねることはできなかった。

本研究では、経済学さらに都市工学を修め、関東大震災の民間における建築復興過程の個別具体的研究で博士号を取得した田中傑氏をセンター研究員、また1920～30年代の政治文化史を専攻、博士号を取得した高野宏康氏を研究協力者に迎えて、震災後の復興過程を総合的に捉える方法的開拓を行い、その成果のうちデータベース化



図版1 築地本願寺 本堂前(震災前)
田中傑 蔵

図版2 築地本願寺
本堂と子院群地図(震災前)
地図資料編纂会編(1989)
第5巻地図編(1)に加工

図版3 築地本願寺 鳥瞰写真(震災後)
田中傑 蔵



図版1



図版3

可能な資料については既存のデータベースに追補作業を行い、公開することを企画している。

関東大震災後の帝都復興においては、都市の空間が公共施設(社会基盤)の整備や民間建物の再建活動によって、また都市の社会経済が上述の空間的変容や社会経済の時代性によって、それぞれ大きく変容した。この二つの側面を田中氏と高野氏のそれぞれの専門性から掘り下げる。

田中氏はこれまで、帝都復興期の東京下町における民間建築物の個別的な再建実態を研究してきたが、これは帝都復興に関する都市・建築分野における既往研究が行政機関の編纂による記録の読み取りを中心に展開している、民間の復興活動を対象から外していた領域である。

公的な歴史は行政機関の手許に集められた質・量ともに相当な情報にもとづいて編まれているが、一方ではその記述が当局の「見せたい部分」に偏っている危険性もある。そのような「歴史」に対して検証を加えるためには、一次資料に立ち戻ること、公的な歴史が扱わない資料(私的資料)を用いることが必要である。具体的に

は、区画整理事業の移転計画図などの公刊された地図資料に加え、写真や絵画、そして当時の庶民にとってのメディアである絵葉書やパンフレットなどの非文字資料を用いて都市構造の変容の実態をその物理的側面および社会経済的側面の双方から明らかにするのである。併せて、社会基盤の整備にともなう居住環境の変化を新聞・雑誌記事などによって把握して分析し、「近世」の名残を色濃く残していた関東大震災までの東京と、モダンボーイ・モダンガールの闊歩する「近代」の東京との間の連続・非連続性の問題について、新たな知見を得ることを試みる。

本研究は1)日本橋魚河岸、2)築地、3)西浅草をフィールドとする予定である。1)魚河岸を中心とした商業文化の繁栄を謳歌した日本橋一帯が壊滅的な打撃を受け、これを契機に築地へと移転することとなったこと、2)その築地が江戸期以来、西本願寺築地別院とその60近い子院の境内や墓所を擁した宗教空間であったところに、魚河岸(のちの中央卸売市場)が移転してきたことで商業空間へと急激に変容したこと、3)寺町であった西浅草で

は、大小さまざまな寺院とその墓地を郊外へ移転させ、区画整理の際の減歩（公共施設の用地として不動産の権利関係者から無償・有償で土地を提供されること）の影響を小さくさせた一方、明治以降、旧幕時代にまして経営が苦しくなった寺院では都心の狭小な境内地を処分することで郊外に広大な境内地を確保し、墓苑を中心とした経営基盤の拡充を実現しようとした。以上の三地点の比較考察は「近世と近代との連続・非連続性」を考察するフィールドとして相応しいと考えたためである。

上記研究領域は関東大震災後の研究課題としては未開拓の分野であるが、新たな研究領域の研究統合化以前にまずはなすべきこととして、非文字資料研究センター開所以来、具体的な資料の所在調査とその収集を行ってき

た。現在のところ、資料収集活動は以下の通り（テーマ一覧）であるが、目指す研究方向についての資料的可能性について一定度の予測を立てられる段階に達している。

研究テーマ一覧

東京下町の焼跡における一般的な避難行動・救護活動に関する一次資料（文書、写真、絵葉書）および新聞報道

代表的財閥たる三井各家による救護活動の内容と救護対象者の生活実態

日本橋、築地および西浅草における区画整理前の住居（バラック仮設建築物）の建築状況とその占有者の社会的生活

個別共同研究

中国・韓国の旧日本租界

租界研究で目ざすこと

大里 浩秋（非文字資料研究センター 研究員 / 研究班代表）

● これまで取り組んだこと

私たちが中国における旧日本租界について関心を持つてから、10年余りが経過した。最初は、近代以降の杭州における日本人の存在の仕方に興味があったり、上海における近代都市の形成過程に興味があったりして、それぞれが別個に調べていたのであるが、それらのテーマがいずれも旧日本租界と密接に結びついたものであることに気がつき、他の都市に作られた租界を含めて一緒に調べようということになり、数人が学内共同研究助成を得て手探りの調査を開始した（2001年）2年後に助成が終って、2003年に共同研究の中間報告を「特集 戦前中国における日本租界研究」のタイトルで『人文研究』149号に発表した。しかし、これでは全く不十分であることは書いた当人たちが知っており、もっと調査を続けて補強しなければと考え、ほかの名目で得ていた助成を援用していくつかの地に出かけて資料を集めた結果、先に発表した内容に改訂を加え、建築学の見地からの論文を得、さらに中国で租界研究で成果をあげている学者の論文を得、うしろに関連資料を並べた、中間報告の第2弾『中国

における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』（御茶の水書房、2006年）を公刊することになった。

この本のまえがきで大里が書いたことは、日本租界の中身やそれについての戦前戦後の研究状況、私たちが目ざしたことは何かを簡単にまとめたものなので、若干のリライトをした上で以下に引用する。

「日本が当初租界を置いたのは、下関条約で清国に認めさせた重慶、沙市、蘇州、杭州の四地であるが、そのうちの沙市は準備を進めたものの開設するまでに至らなかった。続いて、天津、漢口、廈門、上海、福州などにも租界を置こうとした。下関条約以降の中国側との交渉で、すでに他国が租界を置いている港に日本も置ける権利があることを認めさせていたからだが、実際に租界を置いたのは天津と漢口だけだった。他の地でも準備はあって、例えば上海の場合、租界を開くべくいろいろ画策したものの、結局は単独の租界を持つことはあきらめて、共同租界中の一角に独特な日本人社会を作ることになり、それを「日本租界」と通称したのである。正式に日本租界を名乗りかつ運営されたのは重慶、蘇州、杭州、天津、